孙昌武教授八十华诞纪念文集

宁稼雨　张培锋　等◎编

天津出版传媒集团
百花文艺出版社

孙昌武教授八十华诞纪念文集

宁稼雨　肖占鹏　湛如　普慧　张培锋◎编

天津出版传媒集团
百花文艺出版社

图书在版编目（CIP）数据

孙昌武教授八十华诞纪念文集 / 宁稼雨等编. -- 天津：百花文艺出版社，2016.9
ISBN 978-7-5306-7087-3

Ⅰ. ①孙… Ⅱ. ①宁… Ⅲ. ①孙昌武-纪念文集 Ⅳ. ①K825.6-53

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2016)第 219198 号

责任编辑：王 燕 徐 姗　　封面设计：明轩文化

出版人：李勃洋
出版发行：百花文艺出版社
地址：天津市和平区西康路 35 号　邮编：300051
电话传真：+86-22-23332651（发行部）
+86-22-23332656（总编室）
+86-22-23332478（邮购部）
主页：http://www.baihuawenyi.com
印刷：天津市永源印刷有限公司
开本：787×1092 毫米　1/16
字数：410 千字　　插页：2 页
印张：38.5
版次：2016 年11 月第1 版
印次：2016 年11 月第1 次印刷
定价：68.00元

孙昌武教授八十华诞纪念文集编撰缘起

孙昌武先生，1937年9月生于辽宁营口，1961年毕业于南开大学中文系，先后于辽宁营口市师范学校、营口教育学院、南开大学等校任教。先生多年来在日本神户大学、日本京都大学、韩国岭南大学、日本早稻田大学、捷克查理大学、台湾静宜大学、香港中文大学等学校担任教职或从事研究，与亚、欧、美和港、澳、台众多大学和研究机构进行学术交流。

先生退休后，仍勤勉治学，笔耕不辍，相继出版《中国佛教文化史》《中华佛教史·佛教文学卷》《佛教文学十讲》《道教文学十讲》《北方民族与佛教：文化交流与民族融合》等著作，洋洋数百万言，于中国宗教文化、文学领域之建树世所公认，垂范学林。成果之丰，影响之广，罕有其匹，诚为吾辈之良师楷模。先生为学务实，不尚空言，不事声张，然桃李不言，下自成蹊，春风化雨，斐然成章。先生受业弟子现已遍布海内外高校、研究机构，或供职于政府机关、文化部门等，师友嘉朋亦常年往来问询，高山仰止。

德以寿征，寿以文重。先生七十华诞之时，同门弟子暨海内外师友即编撰论文集一册，以为先生寿。忽忽十载，值吾师年届八秩之际，同仁共议再编一册文集。蒙先生诸友好、弟子惠赐佳作，以彰德门之庆、椿龄之喜。

文集以学术论文为主，辅以回忆、研究性文字。出版之时，依据大陆出版方面的有关规定，对繁体字文章做了文字转换，并修改了个别文字。不当之处，敬请谅解。

本书的出版得到了天津出版传媒集团、百花文艺出版社的大力支持，在此致以谢意！

目　录

作者名录 …… 1
编撰缘起 …… 1
「東京夢華録」と都人たち…… 小南一郎 1
王梵志及其诗歌的性质献疑 …… 王志鹏 18
《江都督纳言愿文集》语源考 …… 王晓平 32
《礼》与柳宗元的古文 …… 王基伦 50
韩醇《诂训唐柳先生文集》南宋刊本初考 …… 户岐哲彦 76
Miscellaneous Informal Remarks on Narrative Structures
in Chinese Maitreya Accounts …… 安东平(Christoph Anderl) 113
皎然诗学中的华严思想 …… 刘卫林 144
19 世纪初的中国开埠地:东亚"近代"从这里开始 …… 刘建辉 157
论和瑛《西藏赋》对汉大赋的突破与超越 …… 严寅春 181
孟浩然《春晓》在禅林的传播 …… 李小荣 192
论张九龄诗歌意象与身世、人品 …… 李凤银 200
历代张籍评论之批评视域与诠释议题探讨 …… 李建昆 207
《祖堂集》叙事的戏剧性探微 …… 张胜珍 222
中日佛教文化交流两题 …… 张　总、林疏影 233
本土文化与佛教文化的矛盾
——人文视野下《西游记》中猪八戒和牛魔王家族命运 …… 陈国学 258
《太平广记》中《金刚经》崇拜故事研究 …… 范　军 265

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

刘萨诃信仰解读
——关于中古民间佛教信仰的一点探索 …… 尚丽新 278
王龙溪与佛教 …… 赵 伟 292
论中朝三千年诗歌交流的十类文献 …… 赵 季 327
两种《渚宫旧事》稀见抄本考略 …… 施 薇 337
儒释相非久,谁知我独亲
——略说高丽大儒李穡之亲佛 …… 姜剑云 346
沉郁顿挫背后的清狂
——从任华《寄杜拾遗》看被忽略的杜甫清狂性格 …… 莫道才 357
张鹤鸣家世考 …… 袁贝贝 371
唐代女道士诗人李季兰、元淳、崔仲容研究 …… 贾晋华 380
陈寅恪的早期研究工作与西洋东方学 …… 殷祝胜 399
误读? 曲解?
——试以读者角度思考韩愈《原道》一文的论述瑕疵 …… 陶玉璞 411
从"道家曲"到仙游词的转变 …… 桑宝靖 425
宜春禅宗文化的历史地位和当代影响 …… 黄夏年 452
从"一行三昧"看苏轼的居士形象 …… 萧丽华 461
A Xiongnu Family at the Western Han Court
…… 康达维(David R. Knechtges) 489
论《唐宋诗醇》对《读杜心解》之接受 …… 梁德华 511
文学性灵说的佛教思想渊源 …… 普 慧 523
玄奘与弥勒信仰
——以《大唐三藏法师传》《大唐西域记》为中心 …… 湛 如 541
禅宗下火文的历史流变及其文化意蕴 …… 谭 洁 553
淡泊明志,宁静致远
——孙昌武先生的人格印象 …… 宁稼雨 570
我所认识和理解的人文知识分子的信念与品质
——贺孙昌武先生80寿辰 …… 刘俐俐 576
孙昌武教授与佛教文化研究
——以《中国佛教文化史》《禅思与诗情》为中心 …… 张培锋 582
孙昌武教授学术业绩 …… 596

作者名录

（按照作者姓名笔画排序）

小南一郎：日本京都大学名誉　教授
王志鹏：敦煌研究院　研究员
王晓平：天津师范大学文学院　教授
王基伦：台湾师范大学国文学系　教授
户岐哲彦：日本岛根大学法文学部　教授
宁稼雨：南开大学文学院　教授
安东平（Christoph Anderl）：比利时根特大学　教授
刘卫林：香港城市大学　教授
刘建辉：日本国际日本文化研究中心　教授
刘俐俐：南开大学文学院　教授
严寅春：西藏民族大学文学院　副教授
李小荣：福建师范大学文学院　教授
李凤银：天津中德职业技术学院　副教授
李建昆：台湾东海大学中文系　教授
张胜珍：天津财经大学中文系　副教授
张培锋：南开大学文学院　教授
张　总：中国社会科学院世界宗教研究所　研究员
陈国学：云南民族大学文传学院　副教授
林疏影：福建省民族宗教厅
范　军：泰国华侨崇圣大学中国语言文化学院　教授
尚丽新：山西大学文学院　副教授

赵　伟:青岛大学文学院　教授
赵　季:南开大学文学院　教授
施　薇:南开大学图书馆　副研究馆员
姜剑云:河北大学文学院　教授
莫道才:广西师范大学文学院　教授
袁贝贝:南开大学文学院　博士
贾晋华:澳门大学人文学院　教授
殷祝胜:广西师范大学文学院　教授
陶玉璞:台湾暨南大学中文系　教授
桑宝靖:南开大学汉语言文化学院　副教授
黄夏年:中国社会科学院世界宗教研究所　研究员
萧丽华:台湾佛光大学中国文学与应用学系　教授
康达维(David R. Knechtges):美国华盛顿大学　教授
梁德华:香港中文大学中国语言与文学系　教授
普　慧:四川大学中国俗文化研究所　教授
湛　如:北京大学西语系　教授
谭　洁:湖北工程技术学院　教授

「東京夢華録」と都人たち

小南一郎

唐代の都市と宋代の都市とでは、その景観を大きく異にしていた。唐代の都市においては、人々の居住区である坊は周囲に土牆をめぐらせ、人々はその中に押し込められて日常生活を営んでいたのである。たとえば、長安のみやこには広い街路が設けられていたが、その街路に向かって門を開けているのは、それぞれの坊の東西南北に四つ置かれた坊門を除けば、宮城・皇城や大寺院の大きな門だけであり、それ以外は延々と土牆が続くだけの殺風景な景観が広がっていたであった。とりわけ夜禁が厳しく、夜間は坊門なども閉ざされてしまい、特別な祝祭の夜以外は、都大路にも人通りが絶えてしまった。夜禁で家に帰れなくなってしまった人々のための宿泊施設が長安のみやこにあったことは、唐代伝奇小説の代表作の一つである、白行簡の「李娃伝」にも見えている。

しかし、唐王朝の威勢が傾くと、人々は、土牆を崩し、表通りに向かって門を開いて、店舗をかまえるようになる。こうした「侵街」と呼ばれる人々の行動が、都市の景観を大きく変えることになった。街路に向かって多くの店舗がならんでいる、張択端「清明上河図」に画かれているような都市は、宋代に近くなって初めて出現したものなのであった。夜禁もその効力をしだいに失ってゆき、むしろ夜市のにぎわいが都市の繁華を象徴するようにもなる。

唐代までの、政治的原理を中心に据えて造られ、経営される都市に代わって、経済原理を重視する都市が成長し、そうした都市が宋代以降の中国近世社会の基盤になることについては、これまでにも多くの論考や著書が書かれ、検討

が加えられてきた①。ただ、中国近世都市をめぐる議論は多いが、その都市に住む人たち自身が、都市住民として、いかなる意識を持っていたのかについては、まだ十分には解明されていないように見える。こうした都市住民たちの意識には、宋代と明清時期との間にも違いがあって、その変化は都市の歴史的な展開と対応していたに違いない。都市の経済的な構造の究明のほかに、住民意識の形成とその変化についても、分析が加えることが待たれているのである。

もちろん、都市住民としての意識は、中国近世になって初めて生まれたものではなかった。戦国時代から唐代にかけての都市住民たちにも、都市に生活する者としての意識があり、たとえば都市の盛り場に巣食う「悪少年」たちの言行に、屈折したかたちで、住民たちの意識や価値観が反映していたと言えるだろう。しかし、中国近世の都市住民たちは、自分たちの存在について、より大きな自信を懐いており、そうした自己意識が、中国近世文化を独自の色合いで彩ったのであった。かれらが、自分が都市住民であることをどのように意識していたのかという問題は、中国近世文化の性格を考えるためにも、十分に検討しておく必要のある課題なのである。

この小論では、そうした探求のための第一歩として、もっぱら、宋代の都市住民たちがどのように自分たちの存在を意識していたのかについて、北宋の東都、開封の都市繁盛記である、孟元老「東京夢華録」を中心に据えて、考えてみたい。ちなみに、一言で都市と言っても、さまざまな規模のものが考えられるであろうが、都市住民の意識を典型的なかたちで表明するという点から、北宋の首都である開封と、それと対比するために、南宋の首都の臨安(杭州)との状況を分析してみたいと思う。

一 開封の万姓・百姓と士庶たち

この論文では、きわめて素朴な方法ではあるが、宋代には、都市の住民たち

① 斯波義信『中国都市史』東大出版会、2002年(中訳本《中国都市史》北京大学出版社、2013年)を参照。また、宋代の都城全般をめぐっても多くの論著があるが、最近の書物としては、劉方《汴京与臨安 — 両宋文学中的双城記》上海古籍出版社、2013年、を参照した。

を呼ぶ際にいかなる語彙が用いられていたのかという検討から議論を始めたいと思う。宋代の都市生活の具体的な様相については、周知のように、「東京夢華録」「夢粱録」をはじめ、いくつかの記録が遺されている。そうした記事の中で、都市の住民たちを呼ぶ際に、いく種類かの特徴的な語彙が用いられている。まず最初に挙げられるのは、万姓・百姓という言葉である。

「東京夢華録」巻六、元宵の条には、次のように云う①。

> 正月十五日は元宵節である。皇城の正門の前では、前年の冬至のあと、開封府が山棚(木製のやぐら)を組み立て、その木組みは、宣徳楼の真正面に置かれる。見物客たちは、木組みが作られるころから御街の左右の廊下に集まり、そこでは芸人たちの奇術や、歌舞・百戯の出し物が、軒を連ねて上演され、その音楽やかけ声は、十里余りわたってかまびすしく響く。……[宣徳楼の前には]横に並んで三つの門が設けられ、それぞれの門には、飾りを付け、金色の文字で書かれた大きな牌(看板)が掲げられる。[その牌には]中央の門では、都門道と書かれ、左右の門では、左もしくは右の禁衛の門と書かれている。また高いところにも大きな牌があって、「宣和の世に民と楽しみを同じくす」と記されている。……宣徳楼の上では、四方に黄色い縁取りのカーテンが垂らされ、その中に置かれる座席は、御座なのである。黄色の綺羅を用いて美しい舞台が一つ設けられ、御龍直の兵士たちが、黄色い天蓋と扇とを手に持ち、カーテンの外に居並ぶ。……宮女たちがキャッキャ笑いあってしている声が、楼の下の外にいる者たちにまで聞こえてくる。楼の下には、太い木材を積み重ねて露台が一つ作られる。……万姓たちは、みな露台の下で見物をし、楽人たちが、しかるべき時に、万姓たちの音頭を取って、万歳を叫ばせる。

---

① 東京夢華録巻六、元宵(入矢義高、梅原郁注釈『東京夢華録』岩波書店、1983年、を参照)
正月十五日元宵、大内前自歳前冬至後、開封府絞縛山棚、立木正対宣徳楼、游人已集御街両廊下、奇術異能、歌舞百戯、鱗鱗相切、楽声嘈雑十餘里……横列三門、各有綵結金書大牌、中曰都門道、左右曰左右禁衛之門、上有大牌曰宣和与民同樂……宣徳楼上、皆垂黄縁、簾中一位乃御座、用黄羅設一綵棚、御龍直執黄蓋掌扇、列於簾外……宮嬪嬉笑之声、下聞於外、楼下用枋木塁成露台一所……万姓皆在露台下観看、楽人時引万姓山叫。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

こうした記事から、宮城の南正面の門の上の宣徳楼とその前の広場とが、皇帝と見物人(主として都市住民)たちとが接触する空間として大きな機能を果たしていたことが知られよう。門上の大牌に書かれた「民と楽しみを同じくす」という太平の様相が、そこで意図的に演出されていたのであった。ちなみに、元宵節の観燈の行事が「民と楽しみを同じくする」ということで重要視されていたことは、「宋史」列伝百十、何執中伝の、次のような記事からもうかがわれよう①。

> 政和二年(1112)、大長公主が亡くなったことから、上元の日の端門での観燈の行事を止めることになった。何執中が上言をして云った、「長公主さまのことで、人々の期待を封じてしまってはなりません。願わくは特別に日を変えて、民と楽しみを同じくするという趣旨を明らかにしていただきますように」と。

元宵節の出し物の見物人(遊人)は、その多くが開封のまちの住民であっただろうが、皇帝と対比して、かれらは「万姓」と呼ばれている。「民と楽しみを同じくす」とある民たちは、ひっくるめて万姓と呼びかえることのできる存在なのであった。

「東京夢華録」同巻の、元宵節の次の日、十六日の条にも万姓の語が見え、次のように云っている②。

> 十六日には、皇帝は朝廷に出られることなく、朝食を摂られたあと、門(宣徳門楼)の上に姿を見せられるが、その際には音楽が鳴らされ、御簾

① 宋史巻一百十、何執中伝
政和二年、大長公主喪、罷上元端門観燈、執中言、不宜以公主故闕衆情、願特為徙日、以昭与民同楽之意。

② 東京夢華録巻六、十六日
十六日、車駕不出、自進早膳訖、登門楽作、卷簾、御座臨軒、宣万姓、先到門下者、猶得瞻見天表、小帽紅袍、独卓子、左右近侍、簾外傘扇執事之人、須臾下簾、則楽作、縱万姓游賞……其余宮観寺院、皆放万姓焼香。

が巻き上げられ、御座から、万姓に向かってお言葉を述べられる。早くから門の下に来ていた者たちには、小さな帽子に紅色の袍を着て、単独のテーブルに坐る、皇帝の姿を目にすることができる。皇帝の左右には近侍がはべり、傘蓋や扇を持った侍従たちの姿も見られる。ほどなく御簾が降ろされ、音楽が鳴らされて、万姓たちの自由な参観が許される。……その他の道観や仏教寺院についても、みな万姓に開放され、自由に焼香することができる。

同様に、開封のまちでは、さまざまな祝典行事の際に、万姓たちの自由な参観がゆるされている。たとえば、巻二の朱雀門外街巷の条には、次のように云う①。

九成宮内には、九つの鼎が置かれている。そのすぐ東側が迎祥池である。この池では、両岸から柳の枝が垂れ、蒲や蓮が生え、鴨やカイツブリがその間を泳ぎ、橋亭や台榭が、各所に目立つように配置されている。毎年、清明節の日だけに、万姓に解放され、一日中、参拝したり遊覧したりすることが許される。

もう一例を挙げれば、巻三の相国寺での自由市場を述べた条には、次のように云う②。

相国寺の境内では、月ごとに五回、万姓の交易が許される。

こうした用例を通して、万姓とは、支配・被支配という関係の中で、皇帝と対照をなす位置にあり、とりわけ皇帝の許可のもとに、さまざまな恩恵を受ける対象だとされていたことが知られる。

---

① 東京夢華録巻二、朱雀門外街巷
九成宮内安頓九鼎、近東即迎祥池、夾基址垂楊、菰蒲蓮荷、鳧雁游泳其間、橋亭台榭、棋布相峙、唯毎歳清明日、放万姓焼香游観一日。

② 東京夢華録巻三、相国寺内万姓交易
相国寺、毎月五次開放万姓交易。

万姓という語彙は、古くから用いられてきた百姓の観念を拡張した語彙であったのだろう。百姓の語は、西周時期の金文に見える「百生」という表現にまでさかのぼることができる用語であり、元来は「すべての部族」という言葉であっただろうが、やがて一般民衆を指すことになった。この百姓という言葉は、「東京夢華録」にはあまり見えないのであるが、たとえば、巻三の防火の条には、開封のまちで火事がおこった際の消火活動について、百姓の語が次のように使われている①。

> 失火があった際には、馬軍が急いで軍廂主に報告をし、馬兵と歩兵と殿前との三衙、それに開封府が、それぞれに兵士たちを指揮して火事の撲滅にあたり、百姓を煩わせることはない。

この場合の百姓の語も、支配者の視点から、一般住民を指して言う言葉として使われている。

開封のまちの住民たちを呼ぶに際して、士庶という言葉も使われている。「東京夢華録」巻二の朱雀門外街巷の条には、次のように云っている②。

> 南熏門 — この門は、一般の士庶たちの殯葬の馬車や輿は、みなこの門を通って外に出ることが禁じられている。

この士庶という言葉が、身分階層的な意味をこめて、一般の住民たちを指して呼ぶ用語であったことは、次のような例からも知られるだろう。巻四の皇后出乗輿の条に、女性たちの乗り物の階層的な違いを述べて、次のように云う③。

---

① 東京夢華録巻三、防火
軍廂主馬歩軍、殿前三衙、開封府、各領軍級撲滅、不労百姓。

② 東京夢華録巻二、朱雀門外街巷
南薫門、其門尋常士庶殯葬車輿、皆不得経由此門而出。

③ 東京夢華録巻四、皇后出乗輿
皇太后、皇后出乗者、謂之輿、比檐子稍増広、花様皆龍 …… 士庶家与貴家婚嫁、亦乗檐子、只無脊上銅花朶。

皇太后や皇后の外出の際の乗り物を輿と呼ぶ。檐子に比べてややゆったりしている。付けられた紋様は、すべて龍である。……士庶の家でも、貴家と婚姻を結んだ際には、檐子に乗ることがある。ただ、その場合の檐子には、上に銅の鳳凰や花飾りは付けられない。

ここでは「貴家」と対照するかたちで士庶の語が用いられている。巻八の七夕の条も同様である。七夕の節日に売り出される摩睺羅の像を、人々が競って購入することを述べた中で、次のように云う①。

禁中も貴家も士庶も、ともに季節の景物を追い求めるのである。

すなわち士庶とは、宮中関係者でもなく、身分のある一族でもなく、一般の都市住民たちを指していう言葉なのであった。士と庶との区別こそが国の基本理念だと云われるような時代（魏晋南北朝時期）もあったが、宋代になれば、両者を区別する意識は希薄になり、むしろ同じ都市に住む一般住民どうしという一体感が強くなっていたのであった。都市の発達が、士庶の区別を最終的に取り払ってしまったとも言えるだろう。

巻七の、三月一日開金明池瓊林苑の条にも、士庶の語が見える。開封のまちの西に位置する御苑でボート競走が行なわれるに際して、一般の人々にもその見物が許されるという記事である②。ちなみに、金明池でのボート競走を画いた図として、これも張択端の作だとされる「金明池争標図」が遺されている。

三月一日には、州役所の西の順天門外にある、金明池と瓊林苑とが開

---

① 東京夢華録巻八、七夕
禁中及貴家与士庶爲時物追陪。

② 東京夢華録巻七、三月一日開金明池瓊林苑：
三月一日、州西順天門外開金明池瓊林苑、毎日教習車駕上池儀範、雖禁従士庶許縦賞……五殿在池之中心、四岸石甃、向背大殿、中坐各設御幄、朱漆明金龍床、河間雲水戯龍屏風、不禁遊人。

放され、毎日、皇帝がこの池に御幸される際の行事の予行演習がなされる。禁従や士庶たちにも、その様子を自由に見物することが許可される。…… 五つの御殿が、ちょうど池の中心にある。四方の岸辺は石畳で築かれ、それに背を向けて[四つの御殿が配され]、大きな御殿がその中央に位置する。それぞれの宮殿には、御幄(御座のまわりのとばり)と朱漆で金龍が画かれた御床と河間雲水戯龍を画いた屏風とが設けられて、見物人(遊人)の立ち入りが禁じられることはない。

この場合の士庶の意味は、最後に見える遊人とほぼ重なるのであろう。予行演習の日ではあるとはいえ、一般民衆にも皇帝の御座をまじかに見物することが許されていたのであった。こうしたことは、おそらくは唐代以前の政治的色彩の濃い都市では有り得なかったことであり、士庶に向かってさまざまな場所が開放されたことの背景には、「民と楽しみを共にする」という理念が強く働いていたことが知られるのである。

二 開封の都人たち

もう一つ、「東京夢華録」の中で、開封の住民たちを呼ぶ言葉として盛んに用いられているのが、都人という語彙である。前に検討をした万姓や士庶の語と比較して、都人の語には、風俗的な視点が強く含まれているように見える。巻四の会仙酒楼の条には、次のように云っている①。

おおよそ都人の風俗は豪奢であり、なかなか気前も良く、酒店においては、どんな客も、二人だけで向かい合って飲む場合にも、とっくりと酒杯とが一揃い、料理を盛る盤や皿が二揃い、果菜の皿がそれぞれ五つ、水菜の椀をいくつか注文をし、それが銀百両(?)近くの値段になる。

① 東京夢華録巻四、会仙酒楼
大抵都人風俗奢侈、度量稍寛、凡酒店中不問何人、止両人対坐飲酒、亦須用注碗一副、盤盞両副、果菜碟各五片、水菜碗三五只、即銀近百両矣。

ここでは、酒席において、不必要な分まで酒食を注文するのが都人の気風だとされている。同じく巻四、食店の条にも同様のことを云う①。

それぞれの食店には、庁（お座敷）と院（中庭）と東西の廊とがあって、やって来た客は、どの部屋に坐るかが告げられる。客が坐ると、箸と紙とを持った者が一人やって来て、客の一人一人から注文を聴いて回る。都人は贅沢であることから、さまざまなものを注文する。

ここでも、都人が、金に糸目を付けず、さまざまな食品を注文することが記されている。こうした都人が、開封のまちの住民たちを指して言ったものであることは、巻十、十二月の条に、次のようにあることからもうかがわれよう②。

十二月の八日には、まちの各処に僧尼たちが三々五々、出て、列を作って念仏を唱え、銀や銅の沙羅（銅鑼の類）、あるいは立派な盆器の中に、金銅や木雕の佛像を一つ坐らせ、香水に浸し、柳の枝で香水を注がせるように仕立てて、一軒ごとに門付けをしてまわる。大きな寺院では浴仏会をもよおし、また七宝五味の粥を信徒の家にとどける。これを臘八粥と呼ぶ。都人たちも、この日、家ごとに果物やさまざまな材料を入れて粥を作り、それを食べる。……二十四日は交年（小正月）である。都人たちは、夜になると、僧侶や道士を招いて、經を読んでもらい、酒や果物を用意して、神に奉げ、一家全体の罪をあがなう人形や紙銭を焼き、竈馬（印刷された竈神の神像）を竈に貼りつける。

---

① 東京夢華録巻四、食店
　毎店各有庁院東西廊、称呼坐次、客坐、則有一人執箸紙、遍問坐客、都人侈縦、百端呼索

② 東京夢華録巻十、十二月
　初八日、街巷中有僧尼三五人、作隊念仏、以銀銅沙羅、或好盆器、坐一金銅或木佛像、浸以香水、楊枝灑浴、排門教化、諸大寺作浴佛会、并送七宝五味粥与門徒、謂之臘八粥、都人是日各家亦以果子雑料煮粥而食之……二十四日交年、都人至夜請僧道看経、備酒果送神、燒合家替代紙銭、貼竈馬於竈上。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com